東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

予期不安の発生に関する素因ストレスモデルの検討

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2012-05-29
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 渡部,絵美, 上淵,寿, 藤井,勉
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/127846

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ　**63**: 135－143，2012.

予期不安の発生に関する素因ストレスモデルの検討

渡部　絵美*・上淵　寿**・藤井　勉***

教育心理学講座（学校心理学）

（2011年9月28日受理）

問題と目的

「不安（anxiety）」とは，「漠然とした未分化な怖れの感情（笠原，2001）」と定義される精神状態である。これに対し「予期不安（expectation anxiety）」とは，狭義では神経症的な場合を指し，「一度たまたま失敗した状況に再び直面しなければならないと考えただけで生じる不相応に強い不安や，たえず不安があり，たまたま生じる偶然の出来事にそれが容易に結びつけられるような不安の在り方（笠原，2001）」をいう。これは神経症性不安の原型ともいうべきもので，しばしば不安神経症の場合にみられる。しかし，より広義では「直面せざるをえない困難な状況（試験など）を前にした際，誰にでも生じる不安状態（笠原，2001）」を指し，人間が「生まれつきもっている適応反応」（小林・清水・三森・伊豫，2005）である。本研究では，このように広い意味で予期不安をとらえる。

また，予期不安は，近年患者の増加とともに活発に行われているパニック障害（panic disorder）研究の中でその名称が多くみられる。パニック障害とは，さまざまな自律神経症状を伴う突然の激しい不安発作，いわゆるパニック発作を主徴とする疾患である。その概念は1980年にDSM-Ⅲ（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 3rd ed.）に導入され，DSM-Ⅳにおいては繰り返す予期しないパニック発作および予期不安を伴うことと定義されており（片上，2007），主な症状の一つとして，多くのパニック障害の研究の中で予期不安が取り上げられている。

しかしながら，予期不安そのものに焦点を当てた研究は少なく，その発生の仕組みを検討しているものもほとんど見当たらない。予期不安の発生の仕組みが明らかになれば，その発生を予測し，予防できる可能性があろう。

予期不安に関する研究が乏しい一方で，不安についての先行研究は豊富であり，その発生のメカニズムについての検討も行われている。Spielberger（1972）は，精神分析における「現実不安」と「神経症的不安」の概念，およびCattel & Scheier（1961）によって因子分析で抽出された不安の2因子などを踏まえ，不安を2つのタイプに分類した。Spielberger（1972）は，この2種類の不安と外的刺激，行動の関係を「状態―特性不安モデル（state-trait anxiety model）」として示し，ストレッサーの体験が不安の発生に関与することを明らかにした。

また，パニック障害の先行研究において，後山・池田・東尾・植木（2002）は，パニック障害と診断された患者を対象にその発症にかかわる誘因を調査し，大きな心理ストレスがパニック障害の発症に大きく関わっていることを示した。加えて，池谷・切池・永田・河原田・田中・山上（1999）は，臨床場面においてパニック障害の発症にライフイベントなどの心理社会的ストレッサーが関与していることを報告している。

上述のことから，予期不安の発生にもストレッサー体験が関与していることが十分に考えられる。しかし，ストレッサーを体験した全ての人に予期不安が生じるとは考えにくく，同様のストレッサーを体験しても予期不安が生じる人もいれば，生じない人もいるだろう。

＊　横浜市役所
＊＊　東京学芸大学教育学部（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊＊＊　学習院大学文学部（171-8588　東京都豊島区目白1-5-1）

この違いを説明するために有効な手段の一つとして，「素因ストレスモデル（diathesis-stress model）」の考え方を挙げる。素因ストレスモデルとは，一定の素因（脆弱性）を持つ人が，ストレッサーとなるようなネガティブなライフイベントを体験したときに精神病理を発症するという考え方であり，近年，主に抑うつの発生研究などで盛んに用いられている。Metalsky, Abramson, Seligman, Semmel, & Peterson（1982）は，このモデルを用いて，ネガティブなライフイベントにより同じ程度のストレッサーを体験しても，抑うつへの脆弱性と考えられる認知傾向を持つ人は，その認知傾向を持たない人よりも抑うつ反応を生じやすいことを示している。Meralsky et al.（1982）は，素因とは分子生物学的なレベルのものを想定するのではなく，あくまでもパーソナリティ理論におけるものであり，また素因はうつの発生に必ずしも必要なものではなく，他の原因で発生することはありえると述べている。

本研究では，このような素因ストレスモデルの考え方を用い，Metalsky et al.（1982）で定義されているように，分子生物学的なものではなく，予期不安と関連のみられた，すなわち予期不安を発生させやすいパーソナリティを素因と考え，それらの素因を持つ人がストレッサーを受けたときに予期不安が強まるというモデルを検証することで，予期不安の発生の仕組みについて検討することを目的として調査を行った。

方　法

分析対象者　2度にわたる調査の両方に有効回答をした199名（男性72名，女性127名）を分析対象とした。平均年齢は21.77歳（$SD = 1.25$）であった。

調査時期　2009年11月中旬から12月中旬であった。

質問紙

(1) 予期不安の素因候補（パーソナリティ）の測定

和田（1996）が作成したBig Five尺度を用いた[1]。この尺度は，形容詞を用いてパーソナリティの5因子を測定する尺度である。5つの下位尺度「外向性」（e.g.,「陽気な」「活動的な」），「情緒不安定性」（e.g.,「動揺しやすい」「憂鬱な」），「開放性」（e.g.,「想像力に富んだ」「興味の広い」），「調和性」（e.g.,「温和な」「協力的な」），「誠実性」（e.g.,「計画性のある」「几帳面な」）から構成される。各12項目，計60項目から成る。文章型の質問紙よりも短時間で，調査対象者の負担も少なく実施でき，日本人のパーソナリティを測定するのに適している（国里・山口・鈴木，2008）ため，この尺度を採用した。この尺度の信頼性と妥当性は，和田（1996）によって確認されている。回答は「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で求め，各々1－5を配点した。

(2) 予期不安の測定　予備調査の結果[2]や渡部（2003）を基に，「対人」「身体」「学業・能力」各領域について1つずつ仮想場面を設定し，それぞれの状況に自分が置かれている様子を想像するよう教示した。各領域の概要は，「授業時，大勢の人の前で，自身が作成したレポートを発表する直前（対人）」，「健康診断時，看護師から血圧が高いと告げられ，再度測定する直前（身体）」，「必修の授業のテストを受ける直前（学業・能力）」である。

その上で，Spielberger, Gorsuch, & Lushene（1970）の作成した「状態―特性不安尺度（State-Trait Anxiety Inventory; 以下STAI）」の日本語版（清水・今栄，1981）に基づいて作成された，状態不安尺度の短縮版（川合・中島，1998）10項目を用い，各場面における状態不安を測定した。

STAIは，不安を測定する尺度であり，状態不安尺度・特性不安尺度ともに20項目で構成され，ともに「不安存在」と「不安不在」の2つの下位尺度からなる。状態不安は，個人がそのとき置かれた状況により変化する一時的な情動状態としての不安であり，特性不安は，比較的安定した性格特性としての不安である。

本研究では，状態不安尺度の「不安存在」下位尺度の10項目で構成されている，川合他（1998）が作成したSTAI短縮版を使用し，各仮想場面における状態不安を測定することで予期不安を測定した。回答は川合他（1998）と同様，各項目についてどの程度感じるか「全くそうでない」から「全くそうである」までの4件法で求め，1－4と配点した。

(3) ストレッサーの測定　大学生の日常的なライフイベントを測定する大学生用生活体験尺度（久田・丹羽，1987）を使用した。この尺度は，大学生が日常生活で多く経験する生活の出来事67項目から構成されており，各項目は「個人生活」（e.g.,「生活上の仕事（洗濯，炊事など）が増えた」），「家族関係」（e.g.,「家族の誰かと論議，不和，対立などがあった」），「友人関係」（e.g.,「いっしょに楽しめる友人が増えた」），「異性関係」（e.g.,「異性に接する機会が増えた，または減った」），「勉強・研究」（e.g.,「自分の勉強，研究，卒業などがうまく進まない」），「仕事・アルバイト」（e.g.,「アルバイト先でトラブルを起こした」），「クラブ・サークル活動」（e.g.,「クラブやサークル活動で束縛される時間が増えた」），「地域生活」（e.g.,「隣近所に気をつかうようになった」），「個人の内的世界」

(e.g.,「自分の性格について考えるようになった」) の 9 領域に関するものである。信頼性と妥当性については，内容が多岐にわたり，かつその持続性が比較的短い項目を網羅することを目的とせざるを得ないこの種の尺度としては十分な値が得られている（久田・丹羽，1987)。

回答は，まずこれらの出来事について，手続きの項で後述する第 1 回調査から第 2 回調査までの 2 週間に体験したか否かを問い，体験したものにはその際の感情を「とてもつらかった」から「とてもうれしかった」までの 7 件法で求め，－3－＋3と配点した。

本研究では，飯島・川口・伊藤（1995）や森本・丹野・坂本・石垣（2002）の先行研究と同様に，マイナスと評定された項目の合計得点のみを用い，その絶対値をストレッサー得点とした。

手続き　大学生を対象に，調査間隔を 2 週間として 2 回の縦断調査を行った。第 1 回調査（Time1；以下 T1）では予期不安の素因候補と予期不安の測定を行い，第 2 回調査（Time2；以下 T2）では，予期不安と T1 から T2 の間に体験したストレッサーを測定した。質問紙を実施する際，調査への参加は任意であること，答えにくい質問があれば無理に回答しなくてよいことを参加者に教示した。併せて，分析終了後，データは安全に破棄すること，学会発表等でデータを公表する際も，個人が特定されるような形式は取らないことを伝えた。

結　果

各変数の基本統計量および相関　本研究に用いた各変数の記述統計量および Cronbach の α 係数を Table1 に示した。また，予期不安，ストレッサー，Big Five の関連を検討するため，各変数間の相関係数を算出し，その結果も Table1 に示した。

まず，予期不安は T1，T2 ともに，「情緒不安定性」と中程度の正の相関がみられた。ストレッサーについては，「情緒不安定性」と T2 の予期不安との間に中程度の正の相関がみられた。

また，3 つの仮想場面ごとの予期不安の相関係数を算出した結果を Table2 に示した。

どの場面においても，T1 と T2 の予期不安の間には有意な正の相関が得られた。

素因ストレスモデルの検討　予期不安の素因ストレスモデルを検討するために，Metalsky, Halberstadt, & Abramson（1987）にならい，5 つの素因候補変数それぞれにおいて，階層的重回帰分析（Cohen & Cohen, 1983）を行った。これは重回帰分析を行う際に，回帰式に投入する変数に順序を設けることによって，重相関係数の増加分を検討する方法である（森本他, 2002)。本研究では，まず，T2 の予期不安得点を従属変数とし，T1 の予期不安得点を最初に共変量として回帰式に投入し（step1)，次に，独立変数として素因候補変数の得点とストレッサー得点をそれぞれ主効果

Table 1　各変数の記述統計量および各変数間の相関

	1	2	3	4	5	6	7	*M*	*SD*	α
1 外向性	—							44.17	9.21	.94
2 情緒不安定性	−.40**	—						34.39	9.42	.94
3 開放性	.32**	−.30**	—					38.78	6.39	.81
4 調和性	.28**	.15*	.14*	—				42.69	6.29	.85
5 誠実性	−.07	.34**	.31**	.43**	—			37.32	8.53	.92
6 予期不安（T1）	−.15*	.42**	−.27**	.14	.02	—		55.76	13.84	.94
7 予期不安（T2）	−.30**	.56**	−.37**	.18*	.08	.84**	—	57.42	15.30	.96
8 ストレッサー	−.26**	.41**	−.34**	−.13	−.05	.26**	.43**	22.00	17.85	.89

*$p < .05$，**$p < .01$

Table 2　仮想場面ごとの予期不安の相関

	1	2	3	4	5
1 対人（T1）	—				
2 対人（T2）	.85**	—			
3 身体（T1）	.55**	.52**	—		
4 身体（T2）	.55**	.67**	.77**	—	
5 学業（T1）	.66**	.61**	.58**	.55**	—
6 学業（T2）	.66**	.73**	.49**	.67**	.77**

** $p < .01$

注）対人：対人場面における予期不安，身体: 身体場面における予期不安，学業：学業・能力場面における予期不安をさす。

として同時に投入し（step2），最後に素因候補変数の得点とストレッサー得点の積を交互作用として投入した（step3）。

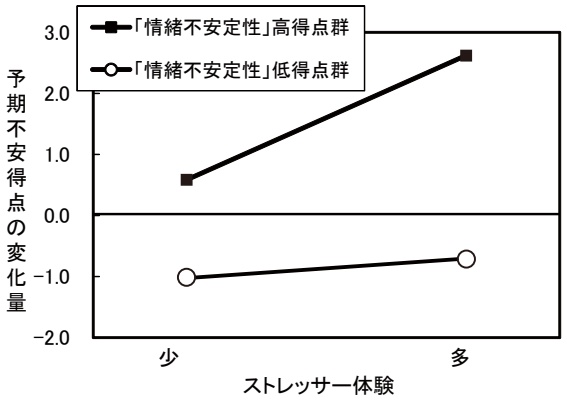

Figure 1　対人場面において，「情緒不安定性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式から予測される予期不安の変化量

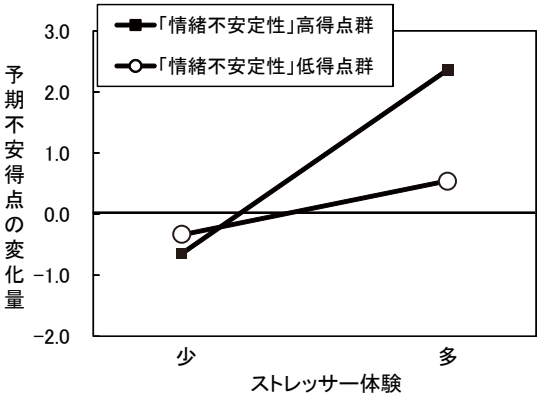

Figure 2　身体場面において，「情緒不安定性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式から予測される予期不安の変化量

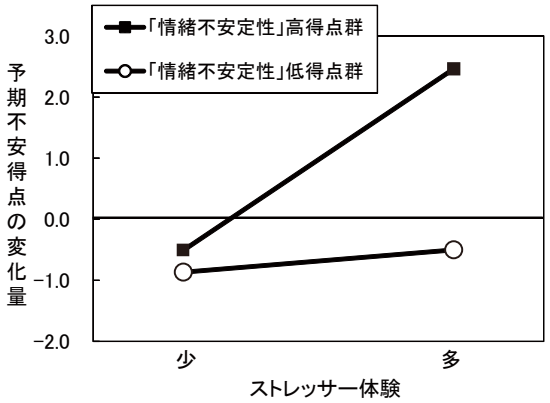

Figure 3　学業・能力場面において，「情緒不安定性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式から予測される予期不安の変化量

この手順で3つの仮想場面ごとに分析を行った結果，「情緒不安定性」は「対人」（$F(4,194) = 183.60$, $p < .001$），「身体」（$F(4,194) = 97.22$, $p < .001$），「学業・能力」（$F(4,194) = 103.50$, $p < .001$）の全場面において，「調和性」も「対人」（$F(4,194) = 158.69$, $p < .001$），「身体」（$F(4,194) = 95.62$, $p < .001$），「学業・能力」（$F(4,194) = 96.97$, $p < .001$）の全場面において，「外向性」は「対人」場面（$F(4,194) = 190.88$, $p < .001$）においてのみ，それぞれ素因とストレッサーに有意な交互作用がみられた。

これらの交互作用の内容を調べるために，Cohen & Cohen（1983）の手順に従い，分析を行った。具体的には，T2の予期不安得点を従属変数とする回帰式に，T1の予期不安得点の平均得点と，素因，ストレッサーそれぞれの平均得点±1標準偏差を代入することにより，(a) 素因得点［高］・ストレッサー得点［高］，(b) 素因得点［高］・ストレッサー得点［低］，(c) 素因得点［低］・ストレッサー得点［高］，(d) 素因得点［低］・ストレッサー得点［低］，の4つの場合における予期不安得点の変化量を予測するものである。

その結果，まず「情緒不安定性」について，Figure1，Figure2，Figure3に示すように，「対人」「身体」「学業・能力」全場面において，「情緒不安定性」の得点が高い時，ストレッサー得点が高い場合に，予期不安が高くなった。

また，場面の区別をせず全体でみても，「情緒不安定性」とストレッサーには有意な交互作用がみられ（$F(4,194) = 190.88$, $p < .001$），Figure4に示すように，先述の場面ごとの結果と同様の結果が得られた。

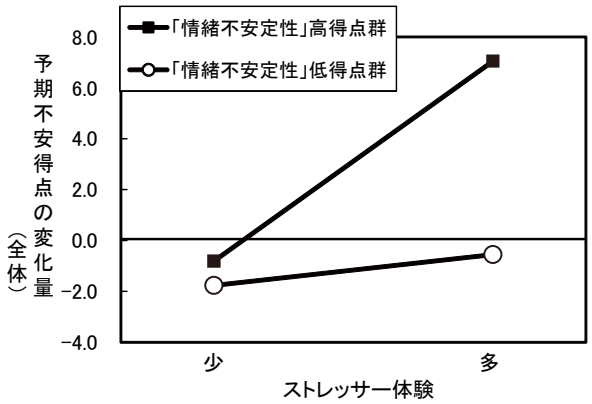

Figure 4　「情緒不安定性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式から予測される予期不安の変化量

次に，「調和性」についても，Figure5，Figure6，Figure7 に示すように，「対人」「身体」「学業・能力」全場面において，「調和性」高得点群は，ストレッサーを多く体験すると予期不安が強まっていた。

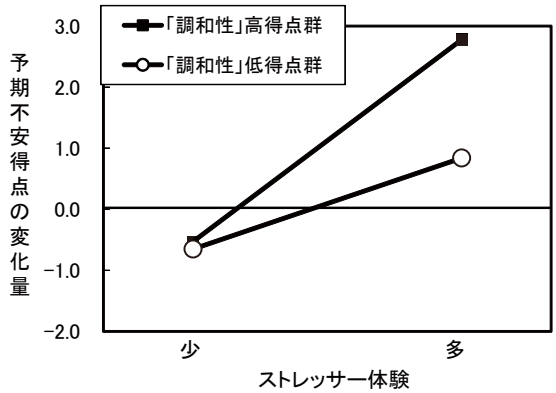

Figure 5　対人場面において，「調和性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式から予測される予期不安の変化量

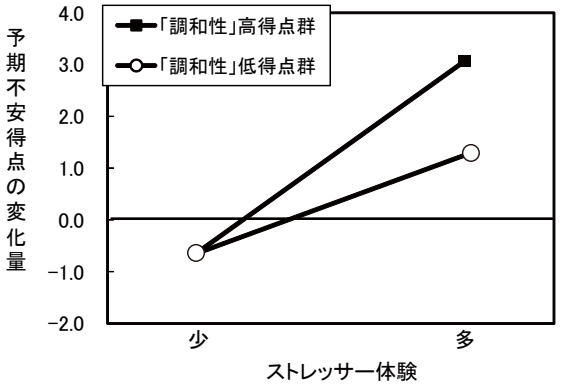

Figure 6　「調和性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式により予測される予期不安の変化量

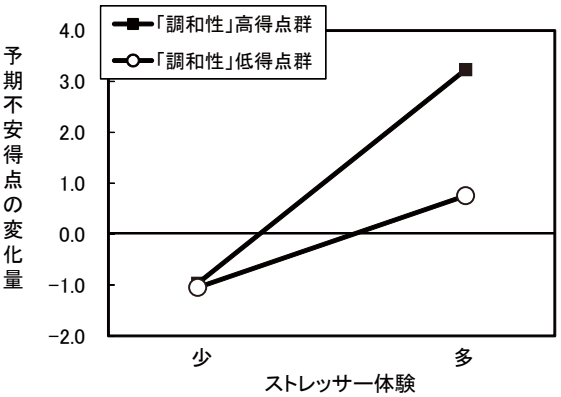

Figure 7　学業・能力場面において，「調和性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式により予測される予期不安の変化量

また，場面の区別をせず全体でみても，「調和性」とストレッサーに有意な交互作用がみられ（$F(4,194)=173.49, p<.001$），Figure8 に示すように，先に述べた場面ごとの結果と同様の結果が得られた。

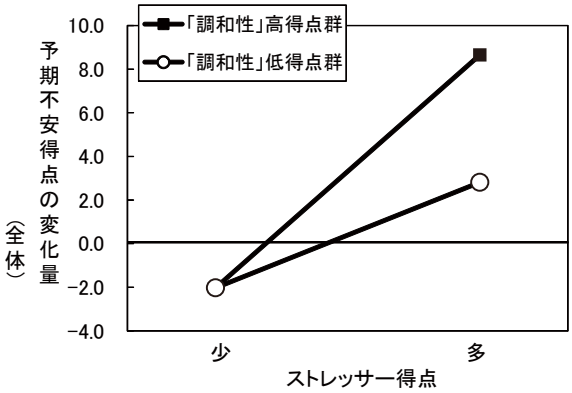

Figure 8　「調和性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式により予測される予期不安の変化量

「対人」場面でのみ交互作用がみられた「外向性」については，Figure9 に示すように，「外向性」得点の低い時，ストレッサー得点が高い場合，「対人」場面における予期不安が高くなった。

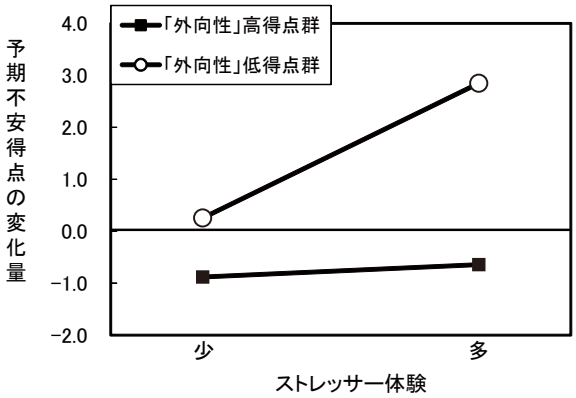

Figure 9　対人場面において，「外向性」の高・低得点群ごとのストレッサー経験の高低による回帰式により予測される予期不安の変化量

考　察

本研究の目的は，予期不安の発生の仕組みを，素因ストレスモデルを用いて検討することであった。発生の仕組みに関する研究を行うことは，その予測や予防の手がかりを見つける上で重要と考えられる。

Big Five を構成する 5 つのパーソナリティ特性を素

因候補として，予期不安との関係について素因ストレスモデルを用いて検討した結果，「情緒不安定性」と「調和性」において，素因とストレッサーの有意な交互作用効果がみられ，これらの素因を持つ人は，ストレッサーを多く体験したときに予期不安を感じやすくなることが示された。また「外向性」については，「対人」場面においてのみ素因とストレッサーに有意な交互作用がみられ，「外向性」の低い人は，ストレッサーを多く体験したときに対人的な予期不安を感じやすくなることが示された。

「情緒不安定性」について　「情緒不安定性」とは，不安を持ちやすく，心配性で悩みや気苦労の多い性格の側面である。本研究の結果は，この記述に合致したものであるといえるだろうし，STAIで測定される不安傾向には情動性が大きく影響していることを報告した清水・山本（2008）の先行研究と同様の傾向を示すものであると考えられる。

また，Big Fiveの他の特性とは異なり，「情緒不安定性」は否定的感情と関連する性格特性であるため，下位尺度の中で唯一，否定的感情経験である予期不安との間に中程度の正の相関がみられたのではないだろうか。

さらに，曽崎（2005）は，情緒不安定性の特性が強い人が及ぼす，身体的，精神的影響について検討を行い，情緒不安定性が高い人は，低い人と比べて抑うつ状態である可能性が高いことを示している。また，不安と抑うつについての関係性も多くの研究で示唆されていることから，予期不安と抑うつに関連があることも十分に考えられる。予期不安についての研究はまだ数少ない。発生の仕組みのみに留まらず，今後予期不安について多様かつ詳細な検討が望まれる。

「調和性」について　次に，「調和性」とは，怒りや攻撃の情動が弱く，温和な面と，他者に寛大で親切な，同調的な面を含んでいる性格特性であり，大沢（2002）は，「自己主張的でなく，批判的攻撃的でないことが，調和性特性をもつ人のプラス面であり，マイナス面でもあるといえる」と述べている。Berkowitz（1993）は，ストレッサーの経験，不快感情の喚起から攻撃・回避に関連した認知による怒りと不安への分化を詳細に説明している。つまり，不快な経験は，攻撃や回避に結びつく様々な記憶，思考，情動や表出的運動反応を生起させ，その結びつきにおいて回避の方が攻撃より強い場合，不安による回避行動に至り攻撃行動は抑制され，反対に攻撃が回避より強い場合，怒りを感じ結果的に攻撃しやすくなる，のである。怒りを抑制する性格特性である「調和性」の強い人が，ストレッサー体験によって予期不安を感じやすくなる，という本研究の結果は，この先行研究を支持するものであろう。

「外向性」について　「対人」場面でのみ交互作用がみられた「外向性」だが，「外向性」とは，社交的で話し好き，陽気で活動的・積極的な性格傾向であり，反対に「外向性」が低いとは，内気で気むずかしく，心配しがち，対人関係を避けがちな傾向をいう。門田・寺崎（2009）は，外向性などのパーソナリティと日常的出来事の相互作用について検討した結果，外向的な人ほど，対人的な出来事をより快と評価することを示しており，また Argyle & Lu（1990）は，外向的な人は，内向的な人に比べて，より多くの対人交流を行うことによって幸福感が高まることを示唆している。さらに八木（2007）は，外向性と対人不安との関連を検討し，外向性と対人不安との間に負の相関関係があることを示している。以上のことから，「外向性」についての本研究の結果は，先行研究と同様の傾向を示すものであると考えられる。

今後の課題　交互作用が有意でなかった素因候補変数の中には，予期不安とある程度の相関が認められたものもあった。これらの関係については，性格特性が予期不安の素因というよりは，予期不安をもった結果である可能性や，相関が擬似相関であった可能性が挙げられる。しかし，森本他（2002）が述べているように，ストレッサー体験の測定期間をより長くすることで，交互作用が有意になる素因候補が増える可能性も捨てきれない。

また，本研究では，予期不安の素因として，個人のパーソナリティについて Big Five を用いて包括的にとらえたが，Big Five の 5 つの性格特性だけで全てが説明されるわけではなく，素因についてのより細かな検討が今後の課題だと考えられる。

さらに，今回，素因ストレスモデルを用いて予期不安の発生についての検討を行ったが，素因ストレスモデルは予期不安を説明する 1 つのモデルにすぎない。予期不安と，素因候補やストレッサー体験などとの関連をさらに検討していくことが必要である。

最後に，倫理やコストの観点から，各変数の測定に場面想定法や質問紙を使用せざるをえなかったことも，この種の研究の限界と言えよう。近年は潜在的な測定法を用いたパーソナリティの測定も行われており，不安を測定した先行研究もある（e. g., Egloff & Schmukle, 2002；藤井，2011）。これらの研究は予期不安ではなく，特性としての不安を対象にしているため区別する必要はあるが，潜在的な測定法を用いて予期

不安を測定するような試みも興味深いかもしれない。

引用文献

Argyle, M., & Lu, L. (1990). The happiness of extraverts. *Personality and Individual Differences*, 11, 1011–1017.

Berkowitz, L. (1993). *Aggression: Its Causes, Consequences, and Control*. New York: McGraw-Hill.

Cattel, R. B., & Scheier, I. H. (1961). *Meaning and measurement of neuroticism and anxiety*. New York: Ronald Press.

Cohen, J., & Cohen, P. (1983). *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences (2nd ed.)*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Egloff, B., & Schmukle, S. C. (2002). Predictive Validity of an Implicit Association Test for Assessing Anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 1441–1455.

藤井勉（2011）．不安IATの予測的妥当性の検討―他者評定との関連から―　パーソナリティ研究，20，57–60.

久田満・丹羽郁夫（1987）．大学生の生活ストレッサー測定に関する研究　大学生用生活体験尺度の作成　慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，27，45–55.

飯島婦佐子・川口祐貴子・伊藤彩（1995）．大学新入生の適応に関する追跡的研究　性格心理学研究，3，37–50.

池谷俊哉・切池信夫・永田利彦・河原田洋次郎・田中秀樹・山上榮（1999）．パニック障害患者のストレス対処行動と気質，性格における男女比較について　心身医学，39，97.

門田昌子・寺崎正治（2009）．パーソナリティ，日常的出来事と主観的幸福感との関連　パーソナリティ研究，18，35–45.

笠原嘉（2001）．予期不安　加藤正明（編）縮刷版精神医学事典　弘文堂　pp.792.

片上素久（2007）．自己記入式パニック障害重症度評価スケール　その信頼性および妥当性の検討　心身医学，47，331–338.

川合武司・中島宣行（1998）．チームスポーツにおける競技開始前の状態不安とパフォーマンスとの関係について　平成7年度―平成9年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書.

小林圭介・清水栄司・三森真実・伊豫雅臣（2005）．認知行動療法の実際―［特別企画］認知行動療法　パニック障害　こころの科学，121，62–68.

国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一（2008）．Cloningerの気質・性格モデルとBig Fiveモデルとの関連性　パーソナリティ研究，16，324–334.

Metalsky, G. I., Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., Semmel, A., & Peterson, C. (1982). Attributional styles and life events in the classroom: Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 612–617.

Metalsky, G. I., Halberstadt, L. J., & Abramson, L. Y. (1987). Vulnerability to depressive mood reactions: Toward a more powerful test of the diathesis-stress and casual mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 386–393.

水野正憲（1982）．不安の研究（3）―不安と自我同一性―　岡山大学教育学部研究集録，60，255–269.

森本幸子・丹野義彦・坂本真士・石垣琢磨（2002）．被害妄想的観念の発生に関する素因ストレスモデルの検討　性格心理学研究，11，2–11.

大沢正子（2002）．5因子論とBig Five尺度の検討　Y-G，MPIとのジョイント因子分析を通して　教育諸学研究，16，7–20.

清水秀美・今栄国晴（1981）．STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版（大学生用）の作成　教育心理学研究，29，62–67.

清水和秋・山本理恵（2008）．感情的表現測定によるBig Five測定の半年間隔での安定性と変動―個人間差，状態・特性不安，自尊感情との関連―　関西大学社会学部紀要，39，35–67.

曽崎裕之（2005）．情緒不安定性と抑うつ傾向について　臨床教育心理学研究，31，126.

Spielberger, C . D. (1972). Anxiety as an emotional state. In C. D. Spielberger. (Ed.), *Anxiety: current trends in theory and research*. vol.1. Academic Press: New York. pp.23–49.

Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. (1970). *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory (Self-Evaluation Questionnaire)*. Palo Alto, California: Consulting Psychologists Press.

後山尚久・池田篤・東尾聡子・植木寛（2002）．女性のパニック障害に関する発症誘因の心身医学的研究　女性心身医学，7，70–75.

和田さゆり（1996）．性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成　心理学研究，67，61–67.

渡部敦子（2003）．対人不安と自己呈示―さまざまな対人場面における自己呈示動機付けと効力感について―　東北大学大学院教育学研究科研究年報，51，187–196.

八木成和（2007）．青年期の対人関係に関する研究（3）―対人不安と社会的外向性・独立性との関連について―　四天王寺国際仏教大学紀要，45，241–251.

山﨑瑞紀・吉川肇子・堀井秀之（2004）．社会事象に関する不安喚起モデル構成の試み　―高病原性鳥インフルエンザを例として―　社会技術研究論文集，2，379–388.

注

1　予期不安についての先行研究が少ないため，本研究では，個人のパーソナリティを包括的に記述するのに有用なBig Five 尺度を用い，予期不安の素因候補であるパーソナリティを包括的に測定することとした。

2　予期不安測定の際に設定する仮想場面を作成するため，予備調査として大学生15名（男性 6 名，女性 9 名）を対象に，予期不安が喚起された事例の収集を行った。手続きとして，「予期不安」についての説明を行った上で，個別インタビューを用いて，日常生活において実際に予期不安を感じた場面について想起を求めた。その結果，22事例を収集し，内容が類似した事例をまとめ，水野（1982）を参考に分類し，「対人」「身体」「学業・能力」の 3 つの領域に分けることができた。

謝　辞

本論文は，第一筆者が2010年 1 月に東京学芸大学に提出した卒業論文を元に加筆修正したものである。本研究の調査にご協力下さいました大学生の皆様に深く感謝申し上げます。

予期不安の発生に関する素因ストレスモデルの検討

A Diathesis-Stress Model for Expectant Anxiety

渡部　絵美*・上淵　寿**・藤井　勉***

Emi WATANABE, Hisashi UEBUCHI and Tsutomu FUJII

教育心理学講座（学校心理学）

Abstract

Regardless of daily stressors, there is a person who causes expectant anxiety, and there is a person who doesn't cause it. However, there is little research on expectant anxiety. Then, "a diathesis-stress model" was advocated as one of the effective means to explain the individual variation of the expectant anxiety generation in the present study, and the verification was done. The questionnaire was investigated for 199 university students. Five subordinate factors of Big Five were taken up as diathesis candidates. As a result of the investigation, it was thought by the stressor, " neuroticism" ($F(4,194)=130.47$, $p < .001$) and "accommodation" ($F(4,194)=133.35$, $p < .001$) among Big Five for expectant anxiety for significant interactions. The process that the influence of neuroticism and accommodation worked as an adjustment variable with the stressor and caused expectant anxiety, was able to be assumed.

Key words: expectant anxiety, diathesis-stress model, Big Five

Department of Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 「予期不安（expectation anxiety）」とは，狭義では神経症的な場合を指し，「一度たまたま失敗した状況に再び直面しなければならないと考えただけで生じる不相応に強い不安や，たえず不安があり，たまたま生じる偶然の出来事にそれが容易に結びつけられるような不安の在り方（笠原，2001）」をさす。日常的にストレッサーがあるにかかわらず，予期不安が生じる人もいれば生じない人もいる。しかし，予期不安自体に関する研究は，ほとんどみられないように思われる。そこで本研究では，予期不安発生の個人差を説明するための有効な手段の一つとして，「素因ストレスモデル」を提唱した。素因候補としてBig Fiveの下位５因子を取り上げ，大学生199名を対象に質問紙調査を用いて検証を行った。分析の結果，予期不安に対して，Big Fiveの5因子のうち，「情緒不安定性（F（4,194）= 130.47，$p < .001$）」および「調和性（F（4,194）= 133.35，$p < .001$）」とストレッサーに有意な交互作用がみられた。ゆえに，ストレッサーに対して情緒不安定性と調和性の影響が調整変数として働き，予期不安が生じる，というプロセスが示唆された。

キーワード: 予期不安，素因ストレスモデル，Big Five

* City government of Yokohama（1−1 Minato-cho, Naka-ku, Yokohama, 231−0017, Japan）
** Tokyo Gakugei University（4−1−1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184−8501, Japan）
*** Gakushuin University（1−5−1, Mejiro, Toshima-ku, Tokyo, 171−8588, Japan）